

舞臺照明に電光を用ゐた始

— 明治十七年五月興行の道頓堀中の劇場 —

今年は電燈五十年記念、電氣が燈火に用ゐられて五十年の記念とあつて、いろ／＼な催しがあつた。それに因みて一體今日の劇場に、主要なる一分科をなしてゐる舞臺照明に電光を用ゐたのはいつ頃からだらうかと調べてみると、それは明治十七年五月十日初日の大阪道頓堀の中の芝居——當時は電光を用ゐるといふので、グット名前もハイカつて「中の劇場」といつた時で、當時の座主は、仕打中の利け者であつた尾張屋である。くど／＼と私が説明の筆を下すよりも當時、尾張屋の名前を以て、廣告を大阪中に撒いたその一枚のビラが、私の手許にあるから手取早く、これをこゝに掲げておくから、就いて見れば分る。「廣告ビラ」は面影を示すに止め、文句は左に全文を掲げておく。

抑電氣燈ノ裝置タルヤ僅カニ一ノ發電機械ト數尺ノ銅線ヲ用ヒ蒸氣機關ヲ以テ之ヲ運轉スルトキハ能ク數多ノ洋燈ニ點火スルヲ得然モ其光ハ一箇ニシテ能ク數町ノ遠キヲ照シ宛然白晝ニ異ナラズ中秋ノ明月ト雖モ爲メニ三舍ヲ避ケザルヲ得ズ況ンヤ瓦斯ニ蠟燭トノ如キニ至リテハ實ニ天壤ノ差アリト云フ可シ其功用ノ如斯著明ニシテ絶テ火災等ノ危險無ク其裝置ハ如斯輕便ニシ隨テ入費ヲ要スル所ニハ他ノ燈火ニ比シテ巨額ノ減少ヲ致スル故ニ現ニ世界各國ノ都府已ニ瓦斯燈ヲ設置シタル者モ漸ク變ジテ電氣燈ヲ用ユルニ至タルモノ比々皆是ナリ是然カシナ

ガラ風トニ泰西諸大家ノ究理ヲ疊ネ經驗ヲ積ミタル結果ニシテ就中當今世界ニ王名ナルモノ米利堅人エードワードフランシスブラツシ氏ノ發明セシモノニ係リ之レヲ我日本帝國一般ノ利用ニ供センガ爲メ該發明者ト專賣條約ヲ結ビ東京銀座街ニ點火シテ世人ノ眼目ヲ新ラタニセシモノハ實ニ大倉組商會ヲ以テ嚆矢トス然リト雖モ此電氣燈タルヤ東京ニ於テハ概ニ該商會ノ勉勵ニ因リテ大政府所有ノ三四工場ニ設置セラレタル有ルモ全國中央公衆諸君ノ縱覽ニ供スルノ學タルハ殆ンド希レナリ茲ニ以テ小生此回大倉組ト條約ヲ結ビ過般西京祇園新地歌舞練場ニ點火シテ名聲ヲ博シタル同組所有ノ機械ヲ移シテ當劇場ノ中ニ設置シ合セテ俳優一同ノ技藝ヲ抽ン當ル五月開場シテ新按演劇ノ所作ト發明電氣ノ功用ト二ツナガラ具備シテ以テ四方諸彦ノ御高覽ニ供セント欲ス是レ併シナガラ本朝演劇ニ電氣燈ヲ設置スルノ創始ニシテ實ニ開明世界ノ恩賴ト申ス可シ四方諸彦ノ冀クハ永當々々賑々敷御來臨アリテ親ク御賞驗御高評ノ程ヲ奉懇禱ト云爾

明治十七年五月

大阪道頓堀中劇場

尾張屋頓首敬白

舞臺照明に電光を用ゐた始

三四九

右の尾張屋の言葉に盡してゐる如く、アーク燈が、日本で初めて公衆のために點せられたのは京の祇園花見小路女紅場（現在の歌舞練場の前身）前に、都をどりの開催中で、これが日本での初めである。そしてこれを「舞臺」に用ゐたのはこの中の芝居の明治十七年五月興行であつた。且つその發電の装置は、京の花小路に京都人を驚かしたその發電機を、千日前の竹林寺に備へつけたのである。芝居よりは、舞臺のこの——今日の言葉でいふ照明が大阪市中を驚かした装置であつて中座と竹林寺との間を織るが如くに、人は行き交うてこの新文明の威力に耽奇の眼を瞞つたのである。そして芝居の前は人の黒山、従つて大入満員をつゞけた。

尾張屋の文中にも「一箇ニシテ能ク數町ノ遠キヲ照シ宛然白晝ニ異ナラズ云々」とある。この數町を白晝の如くにする照明を中の芝居の舞臺の兩側に二箇備へつけ、且つ中座の表にも點じたのであるから當時の大阪人の驚いたことはさもあることと想像される。

一體昔から用ゐられてゐた劇場照明の鯨蠟燭がランプに取代へられた時に、劇場内の蠟燭屋が舉つて大阪では大反對の示威運動を起してゐるが、この中座のアーク燈には、當時の照明係のランプ係が一言の反對をも表明してゐない、恰も大阪の川筋に巡航船が開始された時には、俵屋の暴力的反對示威運動が勃發し、「大阪市」の乗物の歴史に野蠻なる汚點を残したが、巡航船が電車

となつたをり、電車がバスとなつても、この歴史を繰返へさないと同じ道程を踏んでゐるのも、一對の面白い社會事象である。

それはとにかくとして、この五月興行の狂言は何であつたかといふと、前狂言が「天満宮愛梅櫻松」、で中幕が、「乳母争」、切が「眞似浪花朝金佛」といふ朝日新聞所載の新聞小説、早竹お中の狂言である。この「朝日佛」の大團圓が「中の島浪花踊の場」追ひ出しに、劇場で京の都をどりを取入れたのが、これが始めである。そして仕打の尾張屋の腹もこの「浪花踊」の場に電燈を用ゐる。この總をどりの趣向に看客をアツと言はさうと企てたのである。「繪空事」が可なりに潜入してゐる。そして日本で初めて用ゐた「照明」について留意を願ひたい。

この浪花踊の作歌は、署名は、勝能進、勝諺藏となつてゐるが、唱歌は諺藏の筆である。歌詞の角書に「都踊りを其儘に、芦都へ寫繪や」とあつて、

艶イロ 競クラヘ 華ハナ 咲サキ 分ワケ 南ながめ

と名題があつて、歌詞は左の如くである。

二上り「あきらけく。治る時も文明の。三つの都となゑてし。歌舞のまなびも神の世の。岩戸神樂を寫し畫や、登る旭のそれならで。今發明のいちじるき。姿かゞやく電氣燈。照す火景

舞臺照明に電光を用ゐた始

のまばゆくも。たぐひ浪花の一踊り。声の都と夕汐や。梅の花びら五つの櫓。數さへおなじ五花街の。花とけはいの色くらべ。ヨイくヨイヤサ。

「戀に南をやつしてそして。紋日ひがらのやくそくも。二人り添寝のかけ鯛や。ふとんの中のさざめ事。ひなみもよいの風うけて。走る白帆の追手丁度。ヨイくくくヨイヤサ。碇をおろしていつづけに。黄金の數を重ね夜具。三つ四つ五つ。六つの花。ヨイくくくくヨイヤサ。

「しめてからみし鐘事も。筆がものいふ口紅も。ツイかながきのいろは茶屋。おもひあふせや川竹の浪くあらぬ戀中の。芝居戻りも縁のはし。名に橋の香も深く。結びおふたる神さまの。清き流れのむかい船。縁のかためを島臺の。はなれぬ中を松と竹。梅の花笠鶯の。初音床しきとこの梅。二つ枕や三つ盃を。さすて引手の扇さゑ。納れる世の天地金。

「演劇場も末廣く。榮さかうる花舞臺千秋樂とぞ祝しけり。
といふのである。

只一つこゝに注意すべきは、この總踊りの繪が高欄付の高舞臺で、ふと不用意に考へると、若い人達は今日の長唄囃子連中を聯想するかも知れぬ。——即ち今日の芦邊踊浪花をどりが聯想さ

れるのであるが、決してさうでなく、純然たる上方情趣の「囃子連中」で、唄も地唄まがひの所謂江戸唄ものであつた事は申すまでもない。前の方の「囃子連中」の繪についてみるも三味線が、左右に二人づゝ、それに胡弓といふ囃子である。その單調さ加減は想像以上だらう。僅かに蔭囃子で小鼓大鼓が入つた位か。

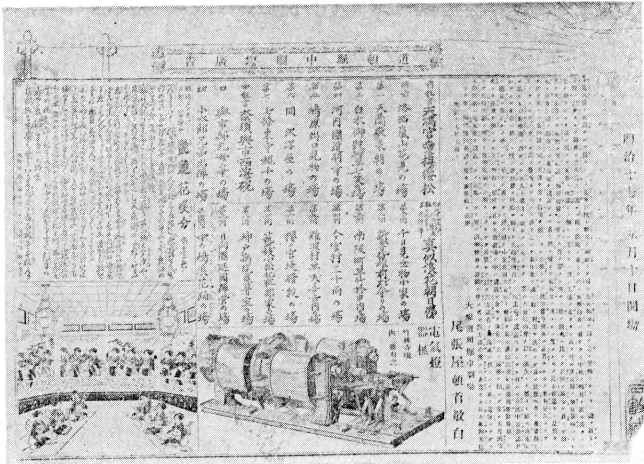
それはその筈で、江戸の囃子連中が大阪に入つたのは、明治もすつと後の卅五六年、梅田劇場へ九代目團十郎とともに、今の寒玉——當時の杵屋六左衛門が、弟の勘五郎と共に來た頃から初まるのであるから、今日の耳と目を以ては想像が逸れる。第五回勸業博覽會の餘興に江戸風の諸藝を取入れたのが、例の北陽の小林剛三とその妻女であつた今の佐藤のおくにか、その先覺者である。これを先驅として、江戸——東京の藝風が靡然として上方の藝界を吹捲くつたのであるから、この卅五六年頃では一流の藝處の藝妓でも鼓の持ち方さへ知らなかつたのである。ましてこの明治十七年五月といふ、初めて日本に電光を照明として用ゐた頃のこの囃子連中は、蓋し想像に餘りある。

序にいふと、この時の尾張屋の手にあつた俳優は福助——後の梅玉、猿之助——後の段四郎でこの時は「勸進帳」問題で市川宗家を破門され東京を構はれて、大阪へ下つてゐた頃である。そ

風珊瑚郎——後の畫家眞田柏園——といふよりも曾我廼家五郎が歌舞伎役者として珊之助とし下役り時代の師匠の珊瑚郎といふ方が、若い人には頭に入り易からう。それに巖笑、翫童二郎、右田作、鴈治郎といふやうな顔ぶれであつた。

《始たる用を光電に明照臺舞》

電燈を日本の舞臺で照明に用ゐるた始めの廣告
 (明治十七年五月大阪道頓堀中劇場)



《ていつに付番の劇翁沙の初最本日》

日本における沙翁劇の始めての番付
 明治十八年五月大阪道頓堀戎座の
 『何櫻彼櫻錢世中』

